

+

2022年

4月第1・2週の主日礼拝説教要約

・ 4月 3日：ヨハネ福音書 12：1-11.

「ベタニアの宴で」

・ 4月10日：ヨハネ福音書 19：5-11.

「誰の権限で？」

衣笠病院教会 牧師 宮原晃一郎

生まれて8日がたって割礼を受けたイエスは、30歳を過ぎてヨハネから洗礼を授かり、さらに3年足らず後には、ベタニアの宴で、自身の最期に備え、香油を塗られます。ただし塗油は、習慣どおりの死後にではなく、まだ生前に。どれもこれも同時代のダヤ民族の人生には必要なことばかりでした。イエスはこの宴の夜に遂行されたことをもって、御自身の葬りの準備が完了したことを告げます。

ところがそこで、無用のドタバタが生じます。イエスのために香油を塗った女性の行動を、問題視する人物が現われます。彼こそ、偽善者のイスカリオテのユダでした。高価な香油を垂れ流しにすることは、けしからんと怒声を浴びせます。香油は女性の私有物ですから、どう使おうとその人の自由のはずです。なのにユダはその行動を咎めるのです。ムダ使いをするくらいなら、売って、そのお金で、困窮な人々を救済すべきであると。彼はもとより高価なものには目が無く、たとえ奪い取ってでも所有したいと思っていたのかもしれませんが。本心を誤魔化すために、とっさに心にもない社会奉仕を口走ったのです。悪人はいつの時代にも、無垢の他人に罪をかぶせることで自分の過失や悪意が隠し通せる、という誤った信念をもつものです。

社会奉仕なら、イエスが周囲の人々に、既に、多くの模範を示し続けてきたことであり今更、香油を売却してでも開始することではないはずです。一方、ユダは、語気を荒げることで、全ては押し通せると信じていたのです。悪意は隠し通せる、偽善は赦される、いや、自分で自分を許すのだ、何が悪い。そうです、ユダはこの時、神の業がその場で刻々と成就しつつあったことなど知る由もなく、示威行動に徹していたのです。彼の中へサタンが出入りしていた証しとして。いつの時代にも、よく見かけるタイプの人間です。2000年前に解決した問題ではないのです。

しかし、何が起ころうとも神の業は成就します。人の手をとおしてでも。殺すことも、また、生かすことも。神のしもべとなるのか、サタンの手下となるのか、人はその定めに従うしかないのでしょうか。

それでも神の業を妨げることにはできません。誰が群れの中にまぎれ込んでいても、遠くにいても、近くにいても。

さて、その夜、その場にはラザロも同席していたことを忘れてはなりません。その家が、もともと、マルタ、マリアと共にラザロが住んでいた

ベタニアの家であることは、ほぼ、間違いありません。

目撃されたことの全てが何を意味しているのかは、ラザロの目にも不明な点があったでしょう。ただ、イエスに新しい命をいただいた彼の目には慈善を説くユダの言葉は、さぞかし虚しい響きをもって受けとめられたであらうでしょう。イエスが命と向き合う態度と、偽善者の詭弁は、全く異質のものであることは明らかでした。

説教 《 誰の権限で？ 》

世界は神の被造物である、といっても、それを証明する術はなく、神話の世界の出来事にとどまります。ただ、その世界の造り主の独り子がこともあろうに被造物である人間の胎内から子供の姿をして生まれ、人間として(＝被造物のままの姿で)世に出るとなると、このストーリーは間違いなく宗教一般からは逸脱したストーリーとなります。実に神は使徒パウロの至言どおりに、人の子の姿をとり、「愚かにも、神自ら宣教の業を買って出た」のです。他宗教の如く、神話の世界にとどまり続けるのではなく。

ただ、神話から逸脱した神(の子)の、その属性からくる神の業は、地上では「不思議な業」としてとらえられ、物議を醸します。見せろ、その不思議な業を見せたら信じてやる。ユダヤ人たちは、異口同音にイエスに求めたのです。では、彼らがイエスの何を「信じてやる」というのでしょうか？ 勿論それは信仰とは程遠い何かです。神キリストにとっては全く無意味な人間の興味本位の物見遊山でしかありません。ただ、信仰とはそういうものだとして「信じている」人々にとっては、今も昔も「巡礼＝観光」で満足しているのと同じです。

悲しいことに一世紀のユダヤ人の信仰とは、そういうレベルにまで墮落していたのです。遠い昔、契りを交わした神と人の関係は、既に地に落ちたも同然でした。

彼らの墮落した信仰を、子孫がそのまま受け継ぐことが困難な情況に陥ると、今度はそこから切り離された教条主義が独り歩きすることとなります。つまり、信仰を正しく受け継ぎたい者たちには第三の道が、真理と命に至る道が示されるであらうでしょう。

キリスト教徒が唱える使徒信条の中に、主イエスが「ポンティオ・ピ

ラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ、死にて葬られ……」とありますが、このローマ総督は、その冷酷な人格ゆえに、イエスが有名になる以前に、既に民衆から敵視されておりました。しかし、ナザレのイエスには寛容な態度で接します。^敵適の敵は味方にもなり得ると。彼いわく、「私には…お前を釈放する権限も、十字架につける権限もある、ということを理解しないのか」~~だ~~。

もし、この時に、イエスがピラトに依頼したならば、彼はそのとおりにイエスの身の安全を保障することができました。けれども、イエスはこう返答します、「上から(＝神から)与えられていなければ、誰にも権限はない」と。相手が誰であれ、ローマ帝国に対する反逆の意志が見出~~だ~~せない限り、嚴罰に処する権限はピラトにもないことは確かでした。総督の本音も実は、訴えを棄却すること、いや、権限を留保してでも黙殺すること、何事も起こらなかったのだと。ユダヤ人の氣紛れならば、ユダヤ人自身が勝手に解決すればよい、と。

けれども最終的にユダヤ人の主張がまざったのは、ひとえに元大祭司アンナスの入れ知恵だったと考えられます。彼は娘婿のカヤパに、こう言わせたのです、「一人の者が、民の代わりに死ぬに越したことはない」。

大騒ぎになる前に、間髪を容れずに処刑するに越したことはないのはローマにとっても同じでした。こうして尊いイエスの命は奪われたのです。

修正

- ・4行目：×適の敵→○敵の敵
- ・6行目：最後の「と」→不要
- ・10行目：見出だせ→見出せ